

学 校 名

北海道洞爺高等学校

問い合わせ先：電話番号

0 1 4 2 - 8 2 - 5 0 5 3

I 学校の概要

1 児童生徒数、学級数、教職員数

生徒数69名（1年31名、2年16名、3年22名）、
教職員16名（平成20年1月31日現在）

2 地域の概況

洞爺湖町は、活火山の有珠山や昭和新山、北海道有数のカルデラ湖である洞爺湖など豊かな自然環境に恵まれている。校舎も支笏洞爺国立公園特別区域に隣接しており、環境教育を推進する好条件に恵まれている。

3 環境教育の全体計画等

以前からボランティア活動として、地域内にある国立公園の美化清掃活動を定期的に行い、ゴミ問題を意識させるとともに自然環境保全の重要性を認識させている。国立公園の自然に直接触れることができる立地条件を生かした環境教育を、教科「理科」や「総合的な学習の時間」において展開している。

II 研究主題

- 1 環境問題に関する地域の自然環境と人間生活との関わりについての研究
- 2 定期的・長期的な環境の変化についての研究

III 研究の概要

1 研究のねらい

- (1) 地域の自然環境と人間生活の関わりについて、科学的な調査を実施し、地域の環境保全を科学的な視点から、生徒に考察させる。
- (2) 定期的・長期的な調査を継続して実施し、この地域の自然環境と気象現象・季節変化・他の地域との関わりについて、生徒に考察させるとともに、地球的視野での環境保全について理解を深めさせる。

2 校内の研究推進体制

- (1) 「総合的な学習の時間」の中での環境学習、水質調査。
- (2) 「課題研究」の中での「ゴミの処理」などの研究。
- (3) 「総合的な学習の時間」の「ネイチャー体験」選択者。
- (4) 「水質調査同好会」の活動で水質調査を行った。
- (5) 生徒や教員の研修のための外部講師による講演会。
- (6) 本研究推進のため、地域や外部研究機関（北海道大学の洞爺臨湖実験所など）に指導をいただいた。
- (7) 「環境教育推進委員会」を組織し、GLOBEをはじめとした、環境教育を統括した。

3 研究内容

- (1) グローブの教育課程への位置付け

ア 第1学年の「キャリアアップ講座」（総合的な学習の時間）における環境調査学習。

イ 第2学年の「理科総合A」による水質調査

ウ 第3学年の「理科総合B」による生物調査

エ 第3学年の専門教科家庭科の「課題研究」による洞爺湖畔の環境調査

オ 全学年縦割り実施の「総合体験」（総合的な学習の時間）による洞爺湖の環境調査

(2) グローブを活用した教育実践

ア 以下の項目において洞爺湖の水質調査を継続的に実施した。水温、pH、電気伝導度、溶存酸素濃度、リン酸イオン、亜硝酸イオン、COD

イ 洞爺湖中心部での水質調査（北海道大学の洞爺臨湖実験所の協力による）

ウ 家庭科「課題研究」の中で「洞爺湖畔のゴミの処理」について調査研究を行った。

エ 「総合体験」の洞爺ネイチャー体験において、洞爺湖の透明度調査、湖の動植物の観察、洞爺湖周辺の地形の学習、湖畔の樹木調査などを行った。

オ 学校行事「クリーンとうや」では、洞爺高校生が中心になって小中学校と合同で地区内の環境美化活動を展開した。

カ 生徒の専門知識の習得と課題意識の高揚、及び指導教員の研修のため、外部講師による講演会を年2回実施した。

キ 教科「家庭科」の調理実習、被服実習と教科「商業科」の販売実習を組み合わせ、地球温暖化対策をテーマにした地域活動を展開した。

IV 研究の成果と課題

1 研究の成果

- (1) 水質調査を通して、生徒が洞爺湖の水に関心を持つことできた。
- (2) 洞爺湖の水はきれいであることがわかった。
- (3) 地域と連携した活動ができた。
- (4) 「高校生環境サミット」に2名の生徒が参加し、本校の環境教育について発表し、高校生サミット宣言の起草に関わり、環境保護の意識を高めた。

2 研究の課題

- (1) 水質の観測結果にあまり変化がなかったため、観測項目の検討や長期的な変化をまとめるようにする。
- (2) 理科の教科での水質調査を行う。

V 研究第2年次の活動計画

- 1 水質の観測を継続し、観測データを蓄積し、いろいろな見方で分析をしていく。
- 2 洞爺湖周辺の生活状況の調査を行う。
- 3 研究の成果を発表する機会を設ける。